論文の要旨

本論文は、中国白話小説の受容を近世期以降の日本文化という枠組みの中で捉えることにより、近世期における白話小説研究の実態を明らかにしようとするものである。

古来日本では漢文訓読によって中国の文献を読み解いてきたが、江戸時代中期、荻生徂徠が「漢文は訓読によらずに中国語として読むべきである」という考えを示す。加えて、そのためには当時の現代中国語、すなわち唐話を学ぶことが必要であると主張したため、唐話学習が流行した。これに伴い、口頭語語彙を用いた書記言語である「白話」で書かれた様々な小説が教材として注目されるようになる。やがてこれらの作品は多くの人々の興味を惹き、日本近世文学に読本という新たなジャンルを呼び起こす。更にはそうした文学作品を通して、所謂「白話語彙」が日本語に流入し、今日も使われる言葉として定着している。このように、白話小説は当時の日本に大きな影響を及ぼしたことは知られているが、広く読まれるようになる過程には、まだ明らかになっていない点が多い。唐話・白話小説の日本への影響については、早くから研究されてきたものの、その視点は読本との関係に偏る傾向にあった。本論文は、唐話学習の流行から、白話小説が読み物として受容されるまでにはどのような過程があったのか、また、白話小説研究が後の学界に与えたどのような影響を与えたかを考察するものである。

具体的には、唐話学の先駆者の一人であった岡白駒という人物に着目し、その活動を検討することによって目的の達成を目指す。白駒に着目する理由は、彼が持つ三つの性格にある。

①唐話流行の初期の人物であるにもかかわらず、唐話習得の方法等には不明な点が多いこと。

②護園（荻生徂徠一派）等の学派）に明確には所属はせず、多くの学者達と自由な議論を行うことができたと考えられること。

③読み物として受容されたことが想定される「三言二拍」の和刻本、「和刻三言」を手掛けていること。

こうした性格を持つ岡白駒とその周辺の人物による活動に検討を加えていくことにより、白話小説研究が近世期以降の日本にもたらしたものを、従来の研究よりも広い視野で捉えることが可能になるのではないかと考えられる。

本論文は全三部から構成される。三章からなる第一部「白駒の『水滸伝』講義」においては、岡白駒が行った『水滸傳』講義の実態を明らかにすることを試みる。まず第一章において、現存する講義録の内容と『水滸傳』諸版本の本文を比較することにより、講義で使用したテキストの確定を行い、白駒は『水滸伝』百二十回本を主としつつ、他の版本も用いながら『水滸傳』講義を行っていたことを明らかにして、『水滸傳』版本が貴重であった当時にあっては驚嘆に値する水準の研究を行っていたことを示す。更に第二章において、講義録における語釈を唐話学者の草分けである岡嶋冠山のものと精密に比較することによって、白駒の唐話学が冠山の著書から学んだものであることを明らかにするとともに、少し時期的に遅れる陶山南濤と白駒の関係は薄いことを示す。第三章では、現存する講義録十五種を綿密に調査し、その系統付けを試みて、系統により内容に異なる点があることから、白駒の講義録が、白駒の講義以外の研究成果も取り込みながら、様々な人々の手によって伝えられてい

ったことを明らかにする。これは、白話小説に関する著述が多いとは言えない白駒の影響が、これまで想定されていた以上に広い範囲に及んでいたこと、彼の講義録が『水滸傳』研究の一つの基礎となっていったことを示すものである。

二章からなる第二部「白駒から一斎へ」では、白駒に学んだ一人であり、白駒と共に「和刻三言」の刊行に携わった出版業者澤田一斎（風月堂庄左衞門）による『水滸傳』研究に注目する。第一章では、和刻本『忠義水滸伝』初集に書き込まれた一斎の講義の記録を詳細に検討し、一斎の『水滸傳』研究も白駒と同じく複数の版本を使用して行われているが、彼が白駒の講義を直接受講してはいなかった可能性が高いことを示すとともに、一斎の講義において和刻本『忠義水滸傳』初集がテキストとして用いられていたことを明らかにする。これは彼が原刻本を利用出来なかったのではなく、講師と受講者が共通のテキストを所持している状態を作るためのものであり、この点から考えて、和刻本初集は講義や会読等の場で用いられる教材だったのではないかと論じる。第二章では、和刻本『忠義水滸伝』二集の刊行について論じる。初集の続篇という形で刊行された二集だが、刊行には約三十年もの開きがあり、初集と二集は一貫した計画の下に刊行されたものとは考えがたいことを指摘し、刊行目的は、和刻本で講義を行っていた一斎や、講義の受講者、和刻本に拠って『水滸傳』を読んでいた人々の需要に応える点にあったのではないかと論じるとともに、二集の施訓には一斎の講義と解釈が一致する点が多いことから、施訓者が一斎であった可能性をも示す。

二章からなる第三部「「和刻三言」小考」では、白駒と一斎が『水滸傳』研究と並行して施訓・刊行した中国短篇白話小説集「和刻三言」について論じる。第一章では、底本を確定するため、諸版本との本文の比較を行ない、最初の二部『小説精言』『小説奇言』の作成にあたり、白駒は複数の版本を校合し、更に自身の知識も活かしながら、より正しいと思われる本文を作り上げようとしていたことを示す。第二章では、白駒と一斎が「和刻三言」に付した序文を通して採録作品の選択について検討し、白駒がおそらくは『今古奇観』や『文心雕龍』の影響の結果として、非現実的な要素を持つ小説を採録しないのに対し、一斎はそのような作品も積極的に採録しようと考えていたことを指摘して、二人の小説観の相違が認められることを示すとともに、観点の違いを超えて、すでに白話小説は教材ではなく、読み物として受容されていたことを指摘する。その上で、丁寧に本文を校訂し、読むべき小説を取り上げるという態度は、『水滸傳』講義の変化、すなわち受講者が俗語を解するだけでなく内容も読み込むようになったこと、刻する対象の取捨選択に自己の小説観を投影しうる短編集を選んだことによって生じたものであると結論づける。

更に「付考」においては、『小説精言』の序文等から、白駒の白話文の捉え方と、それが後世にもたらした影響について論じ、これが白駒の文言文解釈との比較の上で検討すべき問題であること、彼の考え方が富永仲基らによる言語の新たな把握の基盤となった可能性を示す。

「終章」では、以上の議論を総括し、白話小説が近世文学に新たな風を吹き込み、「小説とはどうあるべきか」「言葉とは、文章とはいかなるものか」という問いを広く投げかけ、今日の日本人が持つ言語観や、日本語の形成にも影響したのではないかと論じる。